

# 応力とひずみ

やり直し塑性力学 in 名古屋

名古屋大学 工学研究科

湯川伸樹

yukawa@numse.nagoya-u.ac.jp

# 塑性力学の基礎(応力とひずみ)

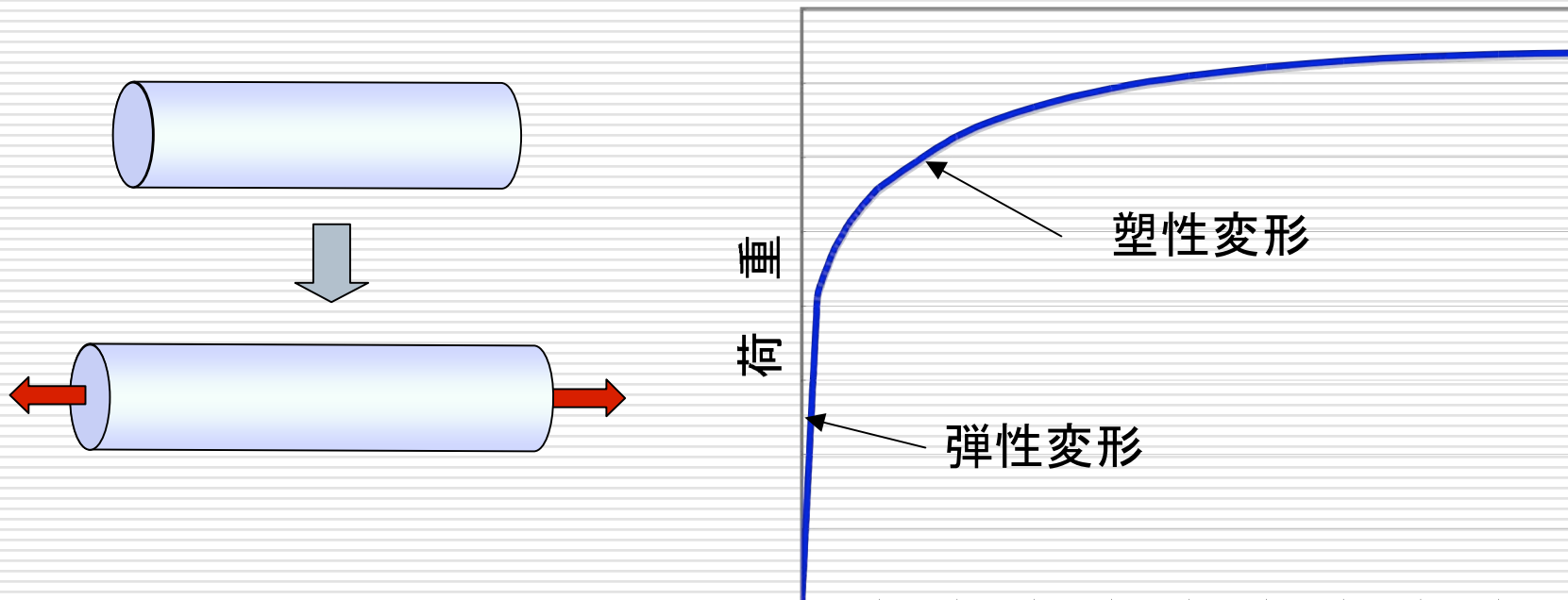
---

- 塑性力学の枠組み
- 応力の定義
- 力の釣合い
- ひずみの定義

# 塑性力学の枠組み

□ そもそも材料が変形するとは？

例えば棒に一軸の力をかけると



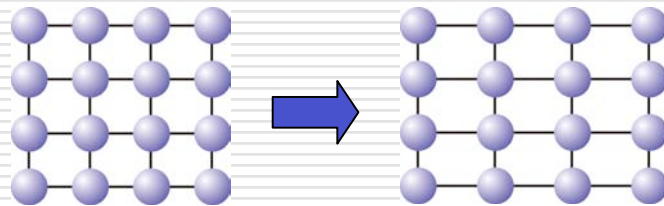
材料の中では何が起きているのか？

# 塑性力学の枠組み

おおざっぱに言えば、

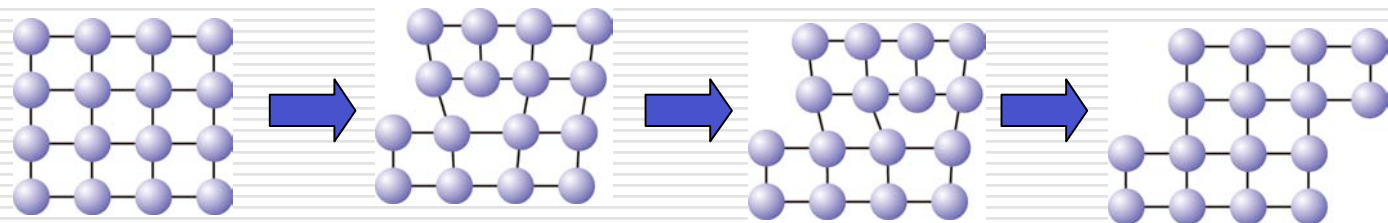
弾性変形

原子と原子の間隔が変化する。



塑性変形

原子と原子の並びがずれる。



いずれにせよ、原子レベルの非常にミクロな現象

## 塑性力学の枠組み

---

- 材料の変形を考える上で、1つ1つの原子の状態を追いかければよいか？
  - そもそも全ての原子の状態を完全に把握することは不可能

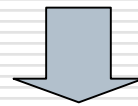
純鉄だと  $1\text{cm}^3$ あたり、おおよそ  $4 \times 10^{22}$ 個  
結晶、転位、欠陥、固溶原子、介在物、、、

- 工学的には、そこまでミクロな情報を必要としない場合が多い

## 塑性力学の枠組み

---

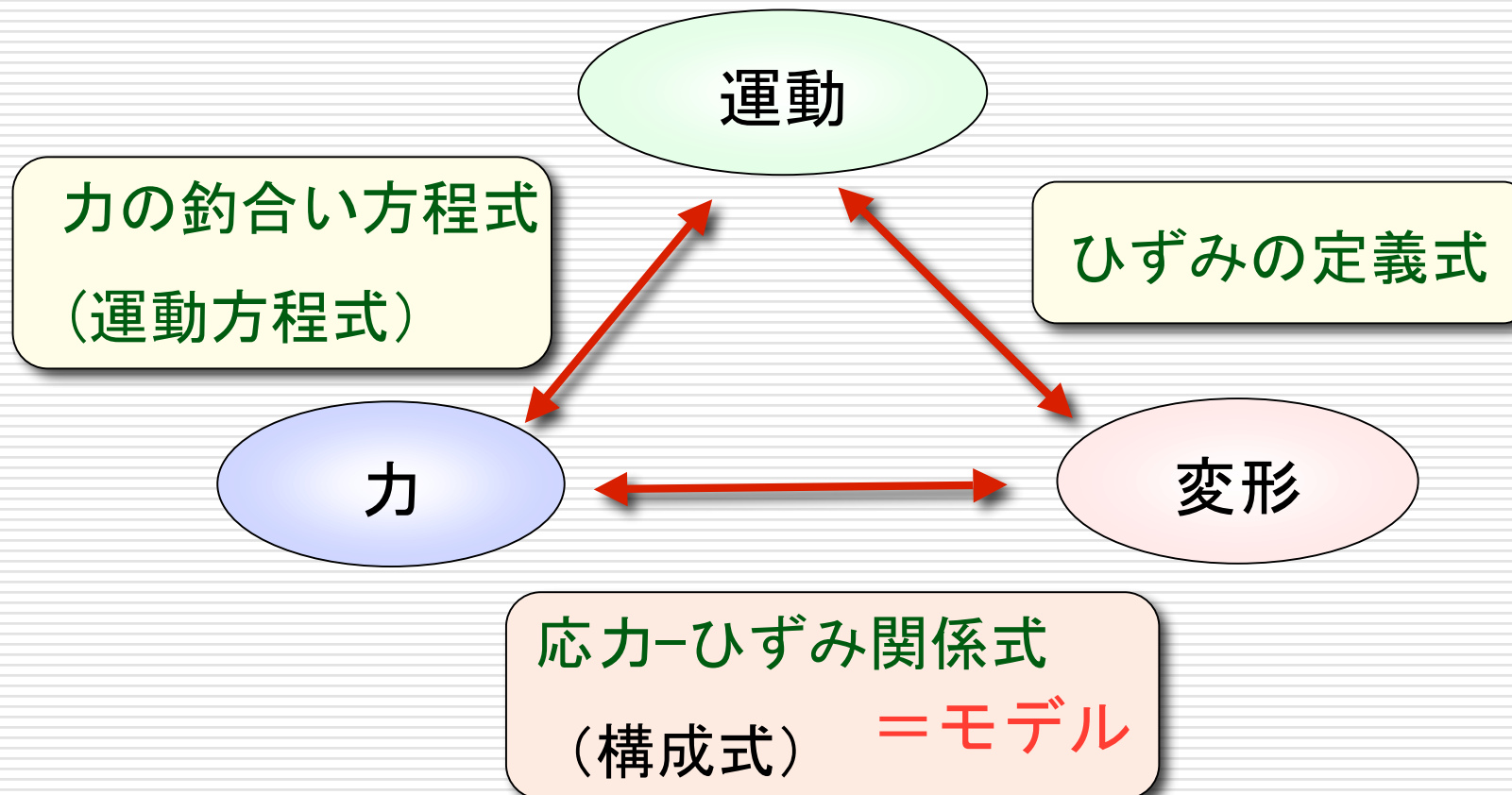
- 材料をマクロ的な観点でモデル化し、数式表現する  
(構成式)
- その特性は材料をどんなに細かく分割しても、  
変わらないと仮定



連続体 (Continuum)

# 塑性力学の枠組み

## 連続体の状態を支配する方程式



# 塑性力学の基礎(応力とひずみ)

---

- 塑性力学の枠組み
- 応力の定義
- 力の釣り合い
- ひずみの定義

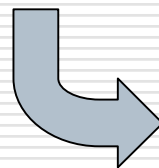


# 応力の定義

---

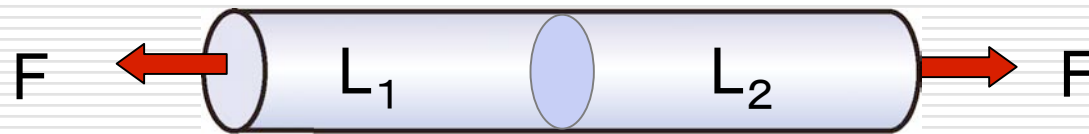
連続体に作用する力の状態を表すには  
どうすればよいか

まず棒材に一軸の荷重がかかって静止  
している場合を考えてみる



内部における力の状態は？

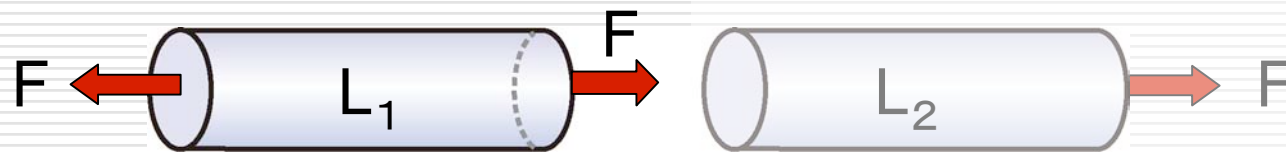
# 応力の定義



↑  
仮想的にこの面で左右に分割する



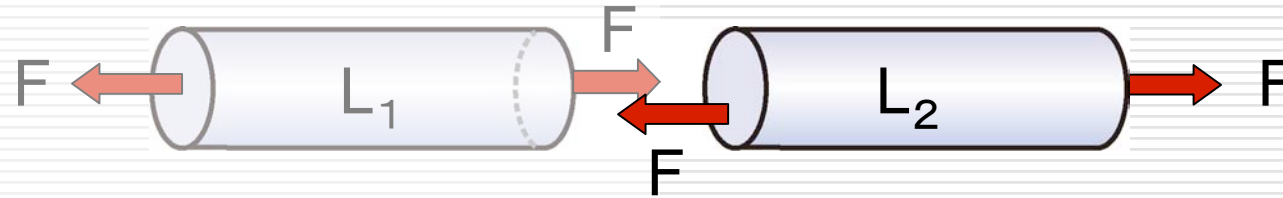
↓  
物体 $L_1$ と $L_2$ は、この面を介して互いに力を及ぼし合っている。



物体が釣り合っている場合、それを分割した個々の部分でも、釣り合っている

# 応力の定義

---



(仮想的な)分割面を介して、物体 $L_2$ から $L_1$ にかかる力と大きさが同じで向きが逆の力が、 $L_1$ から $L_2$ にかかる。

作用・反作用の法則

# 応力の定義

左側だけ表示



この場合分割面には、面に垂直な方向の均一な力がかかる



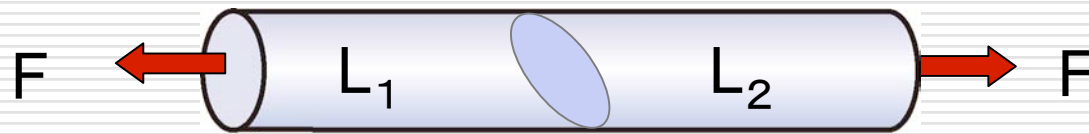
断面積S

単位面積あたりの力は

$$\sigma = \frac{F}{S}$$

# 応力の定義

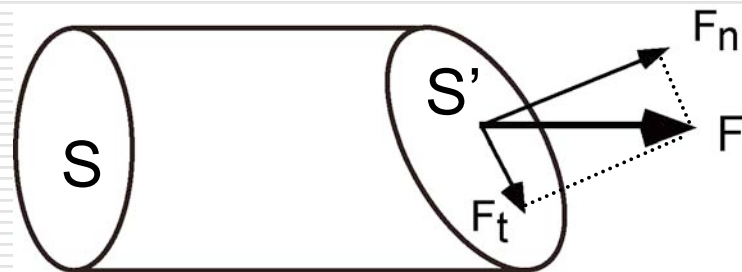
斜めの面で分割したら？



$$F_n = F \cdot \cos \theta$$

$$F_t = F \cdot \sin \theta$$

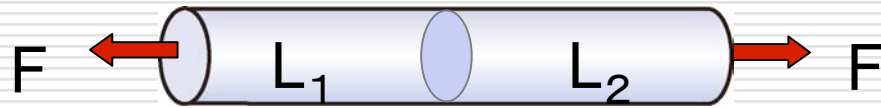
$$S' = \frac{S}{\cos \theta}$$



$$\sigma = \frac{F_n}{S'} = \frac{F}{S} \cdot \cos^2 \theta$$

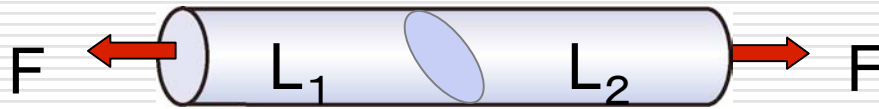
$$\tau = \frac{F_t}{S'} = \frac{F}{S} \cdot \sin \theta \cdot \cos \theta$$

# 応力の定義



$$\sigma = \frac{F}{S}$$

$$\tau = 0$$



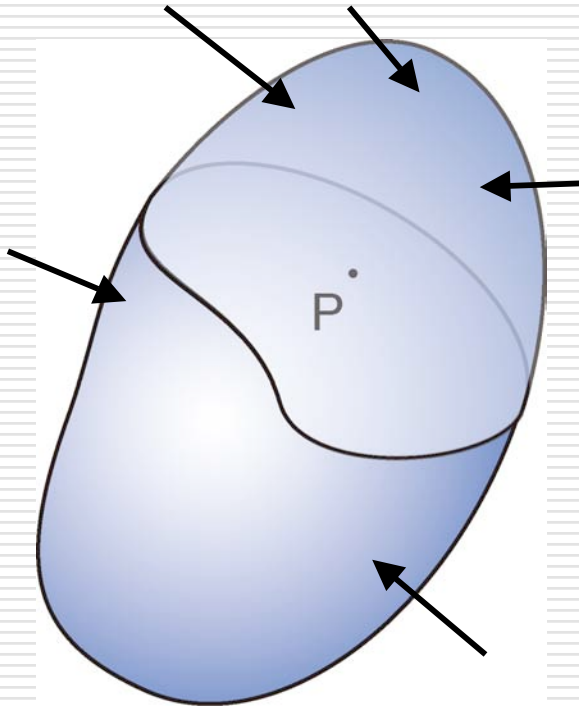
$$\sigma = \frac{F_n}{S'} = \frac{F}{S} \cdot \cos^2 \theta$$

$$\tau = \frac{F_t}{S'} = \frac{F}{S} \cdot \sin \theta \cdot \cos \theta$$

同じ力の状態でも、考えている面が変わると「応力」の現れ方は変わる。

# 応力の定義

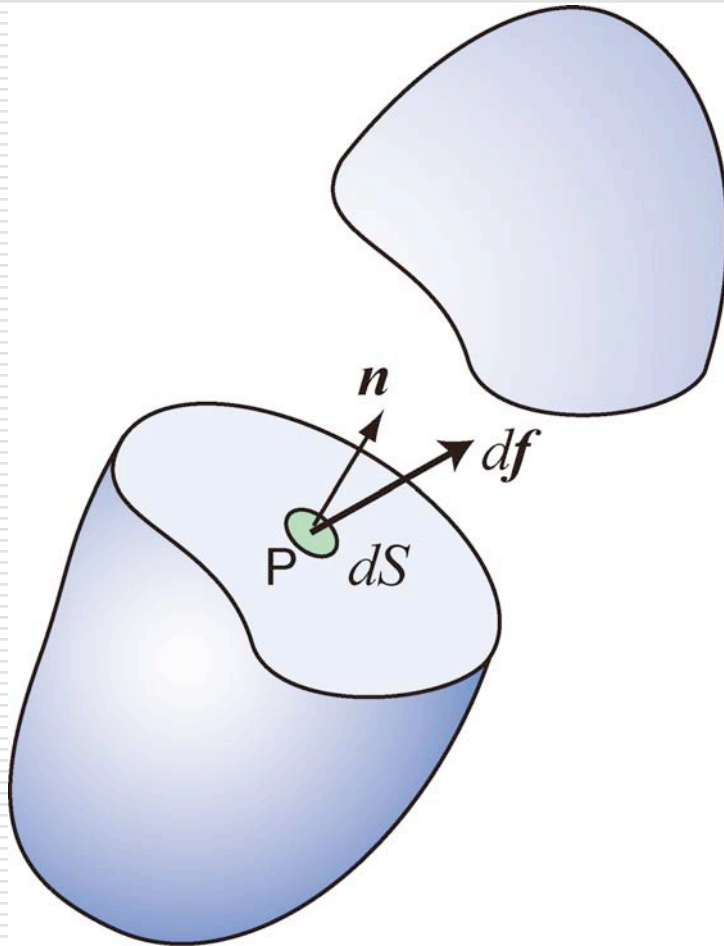
---



一般的な変形の場合、  
材料にかかる内力は分布を持つ。

例えば点Pにおける力の  
状態を表すには？

# 応力の定義



点Pを通る仮想分割面に  
微小面積  $dS$  を考え、  
そこに作用する力  $df$  を考える。

$$t^{(n)} = \lim_{dS \rightarrow 0} \frac{df}{dS}$$

で、表せそう……

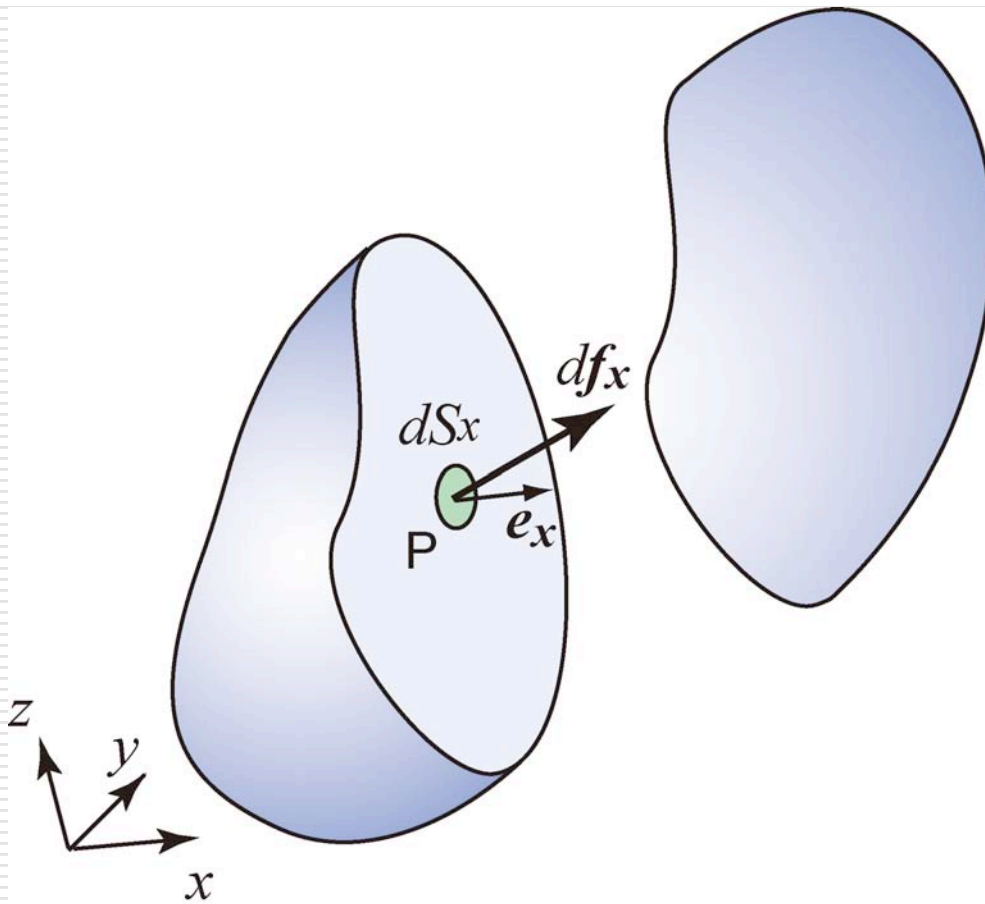
しかし、点Pを通る面は無数にある。



座標軸に垂直な面で考えてみる。



# 応力の定義



例えばx軸に垂直な面  
に対して,

$$t^{(e_x)} = \lim_{dS_x \rightarrow 0} \frac{df_x}{dS_x}$$

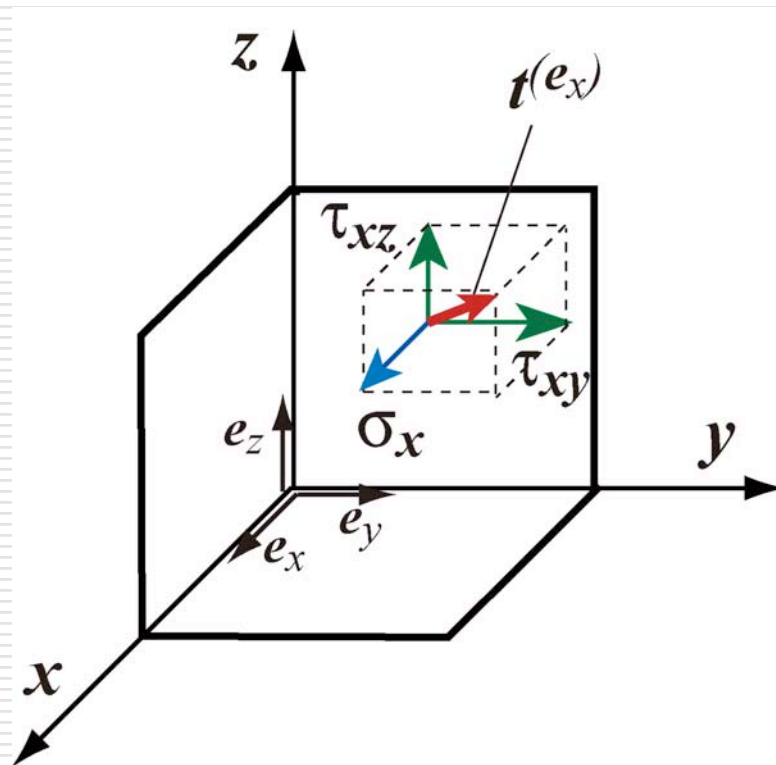
$e_x$ : x軸方向の単位ベクトル

他の軸に対する面についても同様

$$t^{(e_y)} = \lim_{dS_y \rightarrow 0} \frac{df_y}{dS_y}$$

$$t^{(e_z)} = \lim_{dS_z \rightarrow 0} \frac{df_z}{dS_z}$$

# 応力の定義



- ・面に垂直方向の成分  $\sigma_x$
- ・面に平行方向は更に軸方向に分解して  $\tau_{xy}, \tau_{xz}$

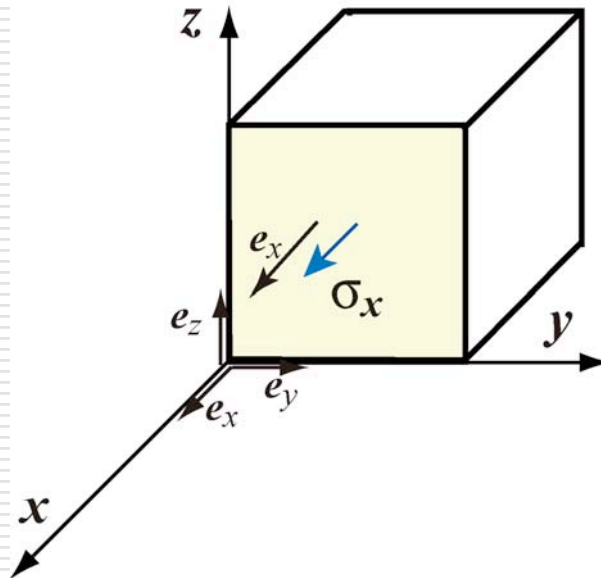
他の軸に垂直な面に対しても同様に

y軸に垂直な面  $\sigma_y, \tau_{yx}, \tau_{yz}$

z軸に垂直な面  $\sigma_z, \tau_{zx}, \tau_{zy}$

9つの応力成分

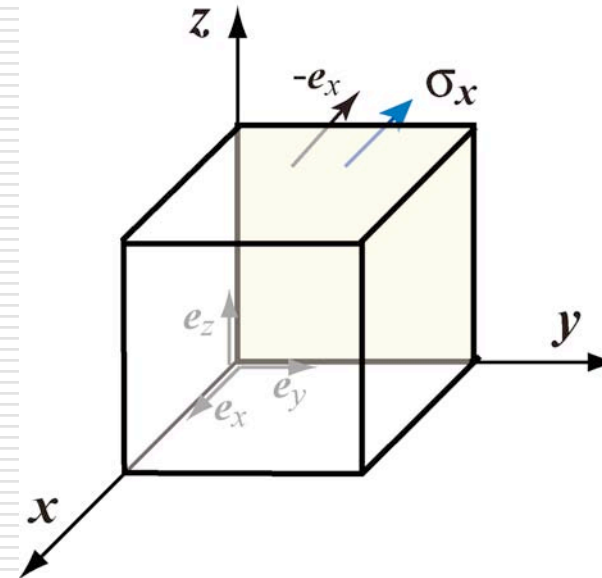
# 応力の定義



外向き法線ベクトルが  
軸の**正**方向



**正**の面  
**正**の方向を向く応力が**正**



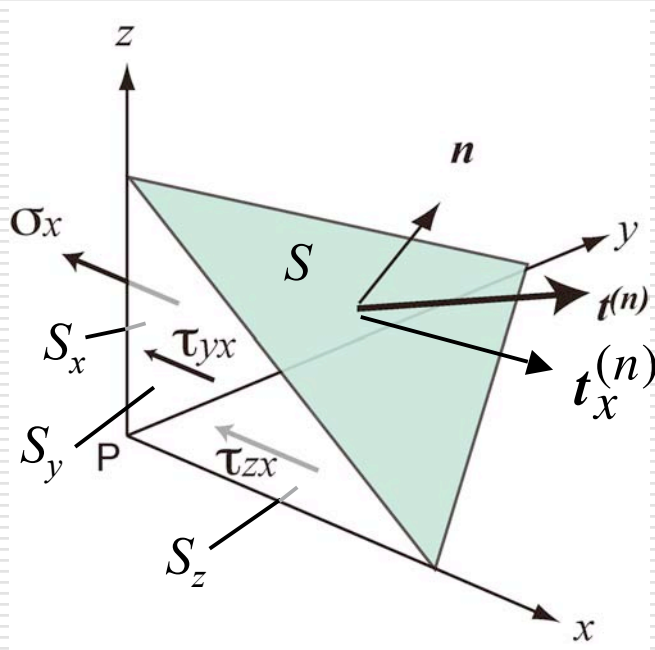
外向き法線ベクトルが  
軸の**負**方向



**負**の面  
**負**の方向を向く応力が**正**

# 応力の定義

$t^{(e_x)}, t^{(e_y)}, t^{(e_z)}$  と  $t^{(n)}$  の関係は？



P点を通り, 軸に垂直な面と  
nの法線ベクトルを持つ面とで  
囲まれた三角錐を考える。

S面に作用するx方向の力

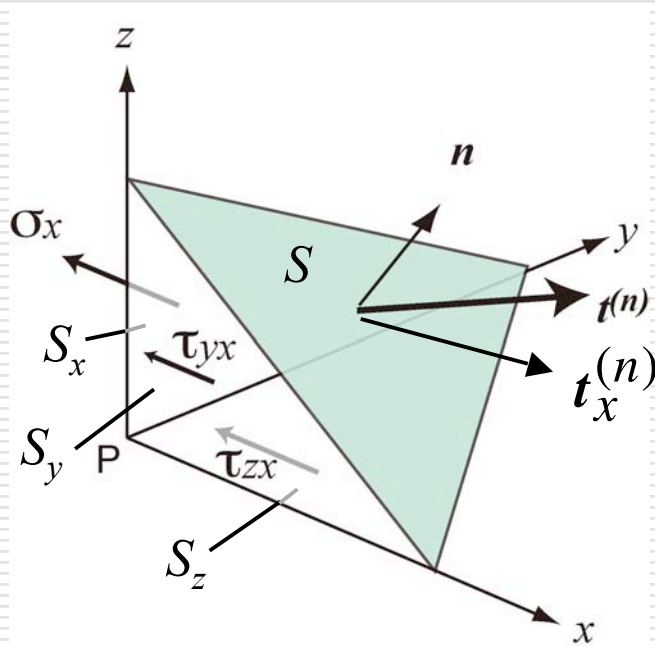
$$f_x = t_x^{(n)} \cdot S$$

$S_x, S_y, S_z$ 面にかかる-x方向の力

$$f'_x = \sigma_x \cdot S_x + \tau_{yx} \cdot S_y + \tau_{zx} \cdot S_z$$

これが釣り合う。

# 応力の定義



$\mathbf{n} = (n_x, n_y, n_z)$  (ただし  $|\mathbf{n}| = 1$ ) として

$$\begin{aligned} t_x^{(n)} \cdot S &= \sigma_x \cdot S_x + \tau_{yx} \cdot S_y + \tau_{zx} \cdot S_z \\ &= \sigma_x \cdot S \cdot n_x + \tau_{yx} \cdot S \cdot n_y + \tau_{zx} \cdot S \cdot n_z \end{aligned}$$

すなわち

$$t_x^{(n)} = \sigma_x \cdot n_x + \tau_{yx} \cdot n_y + \tau_{zx} \cdot n_z$$

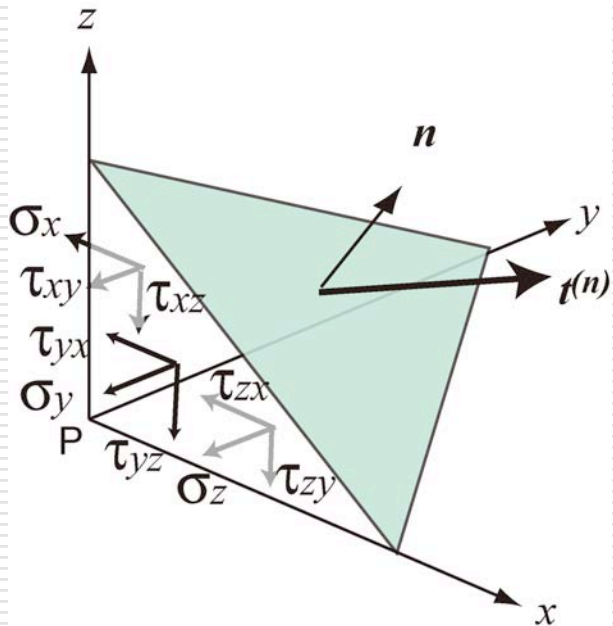
他の方向も同様に

$$t_y^{(n)} = \tau_{xy} \cdot n_x + \sigma_y \cdot n_y + \tau_{zy} \cdot n_z$$

$$t_z^{(n)} = \tau_{xz} \cdot n_x + \tau_{yz} \cdot n_y + \sigma_z \cdot n_z$$

# 応力の定義

まとめると



方向x, y, zを  
1,2,3で表わし  
 $\tau$ も含め  $\sigma$  という  
記号で表すと、

$$\begin{Bmatrix} t_x^{(\mathbf{n})} \\ t_y^{(\mathbf{n})} \\ t_z^{(\mathbf{n})} \end{Bmatrix} = \begin{pmatrix} \sigma_x & \tau_{xy} & \tau_{xz} \\ \tau_{yx} & \sigma_y & \tau_{yz} \\ \tau_{zx} & \tau_{zy} & \sigma_z \end{pmatrix}^T \begin{Bmatrix} n_x \\ n_y \\ n_z \end{Bmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} & \sigma_{13} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} & \sigma_{23} \\ \sigma_{31} & \sigma_{32} & \sigma_{33} \end{pmatrix}^T \begin{Bmatrix} n_1 \\ n_2 \\ n_3 \end{Bmatrix}$$

$$\mathbf{t}^{(\mathbf{n})} = \boldsymbol{\sigma}^T \cdot \mathbf{n}$$

↑  
Cauchy応力テンソル

$\boldsymbol{\sigma}$  が分かれば、点Pを通る  
任意の面における  $\mathbf{t}^{(n)}$  が求まる。

# 応力の定義

$$\begin{Bmatrix} t_1^{(\mathbf{n})} \\ t_2^{(\mathbf{n})} \\ t_3^{(\mathbf{n})} \end{Bmatrix} = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} & \sigma_{13} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} & \sigma_{23} \\ \sigma_{31} & \sigma_{32} & \sigma_{33} \end{pmatrix}^T \begin{Bmatrix} n_1 \\ n_2 \\ n_3 \end{Bmatrix}$$

方向 1, 2, 3 を  $i, j$  で表すと

$$t_j^{(\mathbf{n})} = \sum_{i=1}^3 \sigma_{ij} \cdot n_i \quad (j=1 \sim 3)$$

$\sum$  記号も省略して  $t_j^{(\mathbf{n})} = \sigma_{ij} \cdot n_i \quad (j=1 \sim 3)$

一つの項の中に同じ添字が2回出て来たときは  
 $\Sigma$ 記号があるものと見なす



総和則

## 塑性力学の基礎(応力とひずみ)

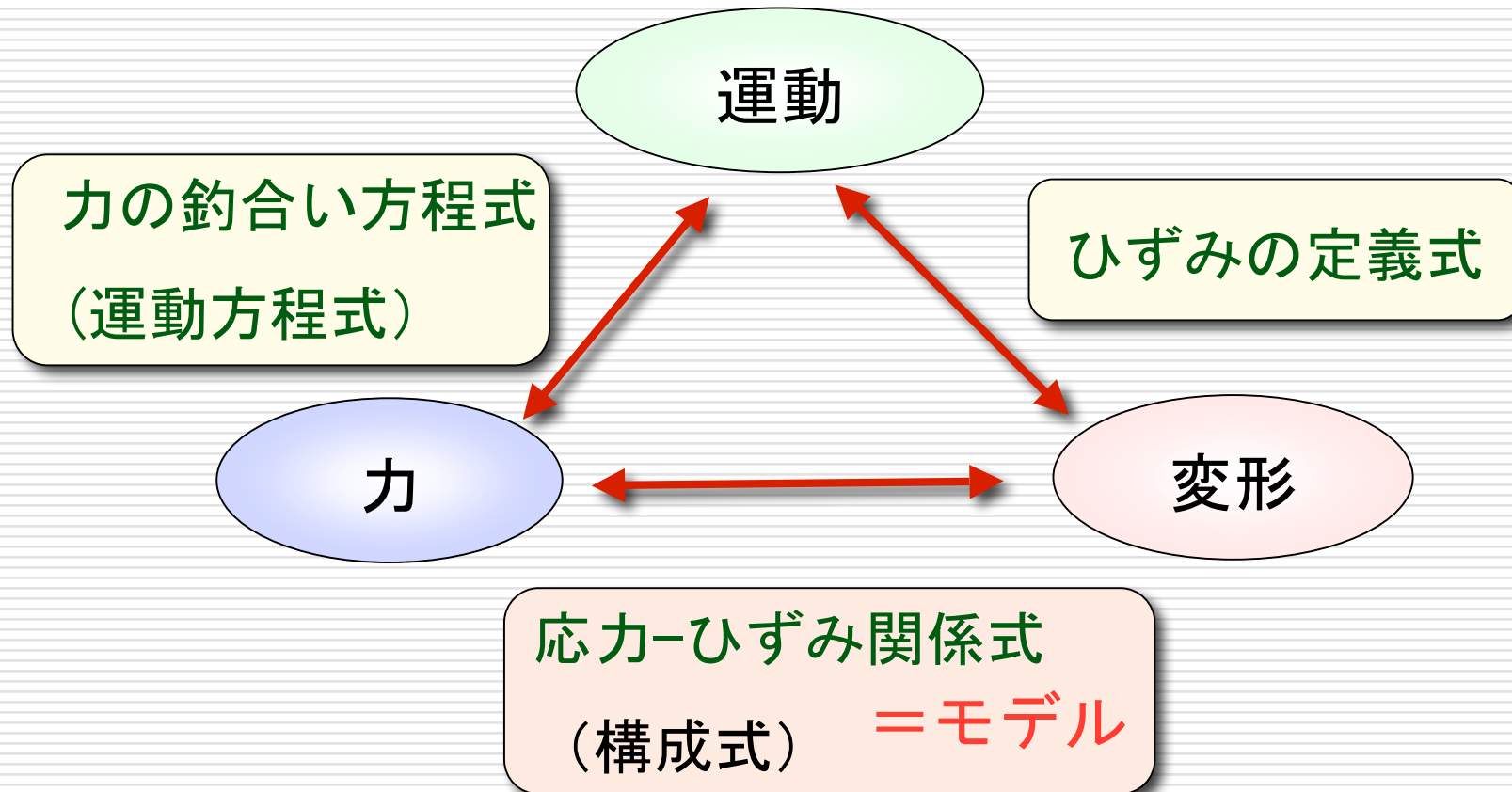
---

- 塑性力学の枠組み
- 応力の定義
- 力の釣合い
- ひずみの定義



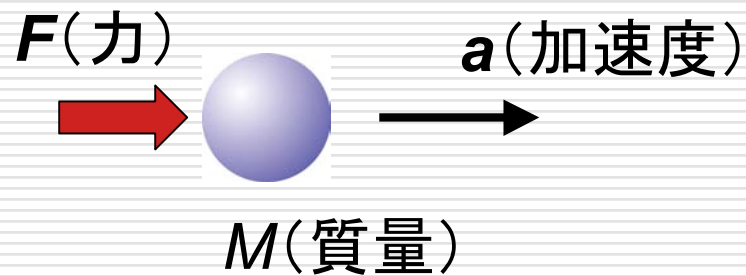
# 力の釣合い

連続体の状態を支配する方程式

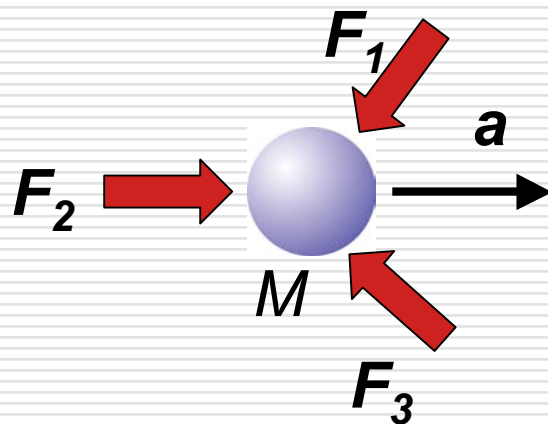


# 力の釣合い

## □ ニュートンの運動方程式



$$M \cdot a = F$$



$$M \cdot a = \sum F_i$$

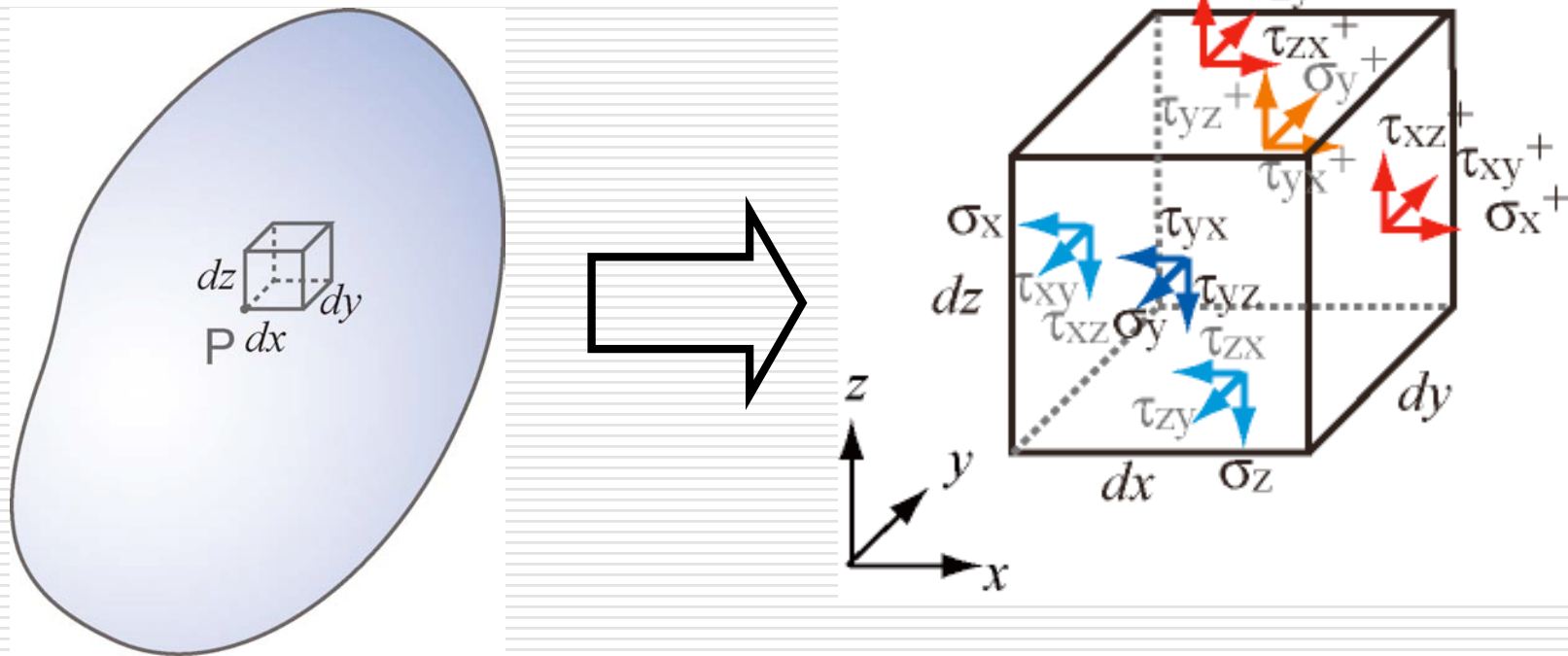
静止しているなら  $a = 0$

すなわち

$$\sum F_i = 0$$

# 力の釣合い

- 大きさ  $dx$   $dy$   $dz$  の微小六面体を考え、これに作用する力の釣合いを考える



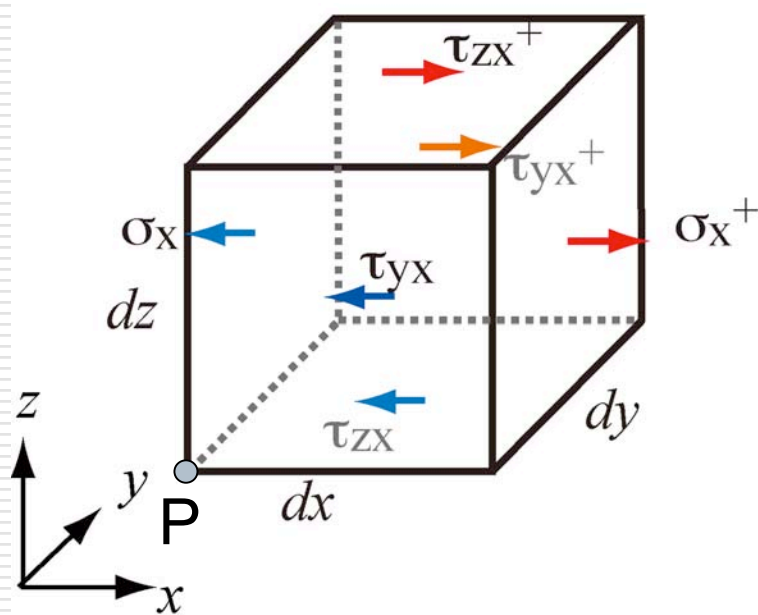
とりあえず、体積力(重力等)は無視して考える

# 力の釣合い

## □ X方向の力の釣合い

$\sigma_x^+$ がかかっている面は、点Pより  $dx$ 離れているので、応力の変化を考慮して

$$\sigma_x^+ = \sigma_x + \frac{\partial \sigma_x}{\partial x} dx + \dots$$



$\tau_{yx}^+$ ,  $\tau_{zx}^+$  も同様

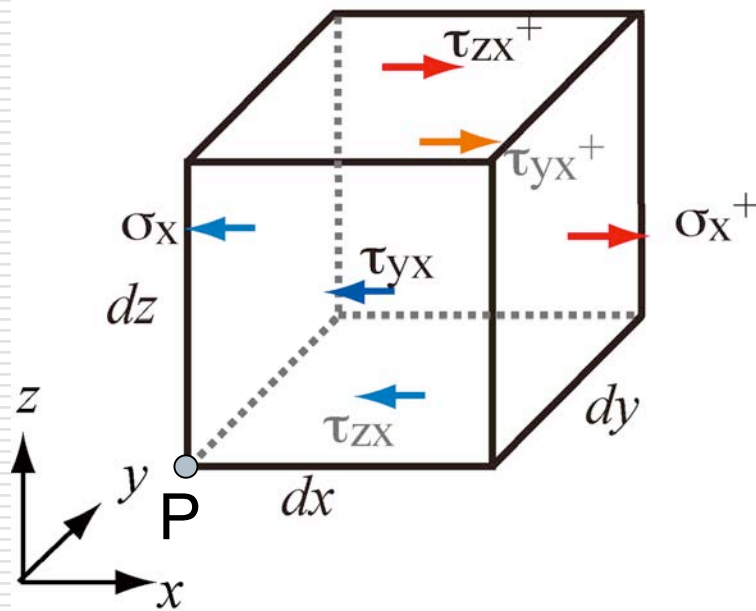
$$\tau_{yx}^+ = \tau_{yx} + \frac{\partial \tau_{yx}}{\partial y} dy + \dots$$

$$\tau_{zx}^+ = \tau_{zx} + \frac{\partial \tau_{zx}}{\partial z} dz + \dots$$

# 力の釣合い

## □ X方向の力の釣合い

各応力に面積をかけて、力の釣り合式を作る。



$$-\sigma_x \cdot dy \cdot dz + \left( \sigma_x + \frac{\partial \sigma_x}{\partial x} dx \right) dy \cdot dz$$

$$-\tau_{yx} \cdot dx \cdot dz + \left( \tau_{yx} + \frac{\partial \tau_{yx}}{\partial y} dy \right) dx \cdot dz$$

$$-\tau_{zx} \cdot dx \cdot dy + \left( \tau_{zx} + \frac{\partial \tau_{zx}}{\partial z} dz \right) dx \cdot dy = 0$$

# 力の釣合い

## □ X方向の力の釣合い

$$\frac{\partial \sigma_x}{\partial x} dx \cdot dy \cdot dz + \frac{\partial \tau_{yx}}{\partial y} dy \cdot dx \cdot dz + \frac{\partial \tau_{zx}}{\partial z} dz \cdot dx \cdot dy = 0$$

両辺を  $dx \cdot dy \cdot dz$  で割って

$$\frac{\partial \sigma_x}{\partial x} + \frac{\partial \tau_{yx}}{\partial y} + \frac{\partial \tau_{zx}}{\partial z} = 0$$

同様に y 方向の釣合い

$$\frac{\partial \tau_{xy}}{\partial x} + \frac{\partial \sigma_y}{\partial y} + \frac{\partial \tau_{zy}}{\partial z} = 0$$

Z 方向の釣合い

$$\frac{\partial \tau_{xz}}{\partial x} + \frac{\partial \tau_{yz}}{\partial y} + \frac{\partial \sigma_z}{\partial z} = 0$$

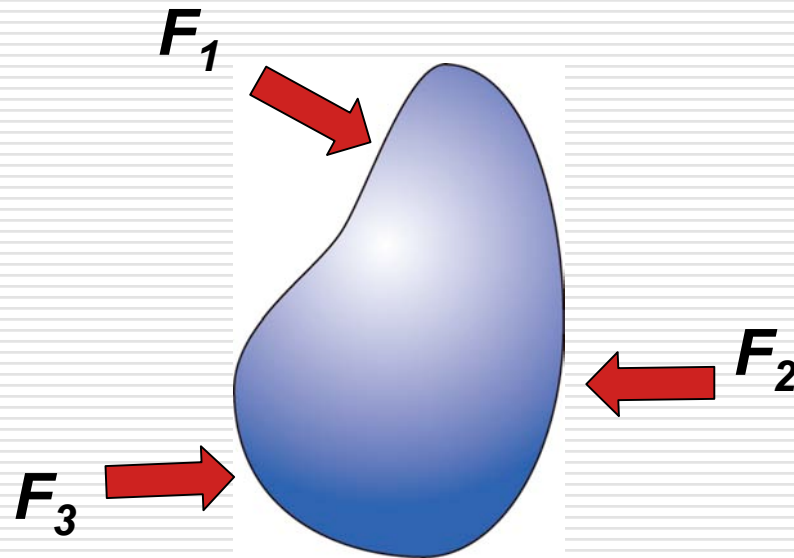
まとめて書くと

$$\frac{\partial \sigma_{ij}}{\partial x_i} = 0 \quad (j = 1 \cdots 3)$$

# 力の釣合い

回転に関して

$$L = \sum m_i \dot{\mathbf{r}}_i \times \mathbf{r}_i \quad \text{角運動量}$$



$$\begin{aligned} \frac{dL}{dt} &= \sum m_i (\ddot{\mathbf{r}}_i \times \mathbf{r}_i + \dot{\mathbf{r}}_i \times \dot{\mathbf{r}}_i) \\ &= \sum (m_i \ddot{\mathbf{r}}_i \times \mathbf{r}_i) \\ &= \sum (\mathbf{F}_i \times \mathbf{r}_i) \\ &= N \end{aligned}$$

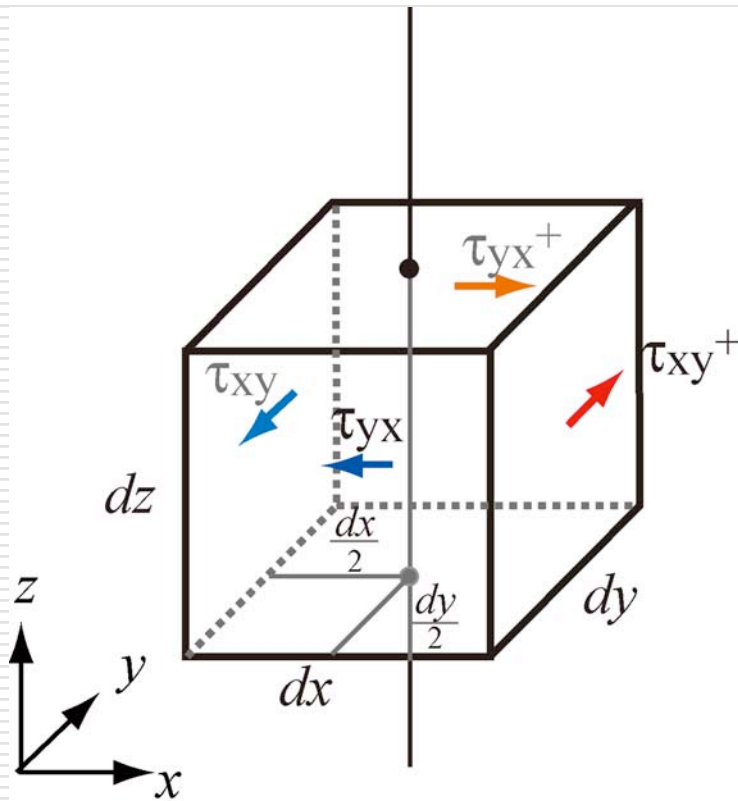
$N$ :力のモーメント

静止しているなら

$$N = 0$$

# 力の釣合い

## □ モーメントの釣合い



z面中心を通る軸周りのモーメントの釣合いを考える。

$$\tau_{xy} \cdot dy \cdot dz \cdot \frac{dx}{2} + \left( \tau_{xy} + \frac{\partial \tau_{xy}}{\partial x} dx \right) dy \cdot dz \cdot \frac{dx}{2}$$

$$- \tau_{yx} \cdot dx \cdot dz \cdot \frac{dy}{2} - \left( \tau_{yx} + \frac{\partial \tau_{yx}}{\partial y} dy \right) dx \cdot dz \cdot \frac{dy}{2} = 0$$



## 力の釣合い

### □ モーメントの釣合い

$$\tau_{xy} \cdot dy \cdot dz \cdot dx + \frac{\partial \tau_{xy}}{\partial x} dy \cdot dz \cdot \frac{dx^2}{2}$$

$$- \tau_{yx} \cdot dx \cdot dz \cdot dy - \frac{\partial \tau_{yx}}{\partial y} dy \cdot dz \cdot \frac{dy^2}{2} = 0$$

両辺を  $dx \cdot dy \cdot dz$  で割ると

$$\tau_{xy} + \frac{\partial \tau_{xy}}{\partial x} \cdot \frac{dx}{2} - \tau_{yx} - \frac{\partial \tau_{yx}}{\partial y} \frac{dy}{2} = 0$$

$dx \rightarrow 0, dy \rightarrow 0$  とすると

$$\tau_{xy} = \tau_{yx}$$

同様に

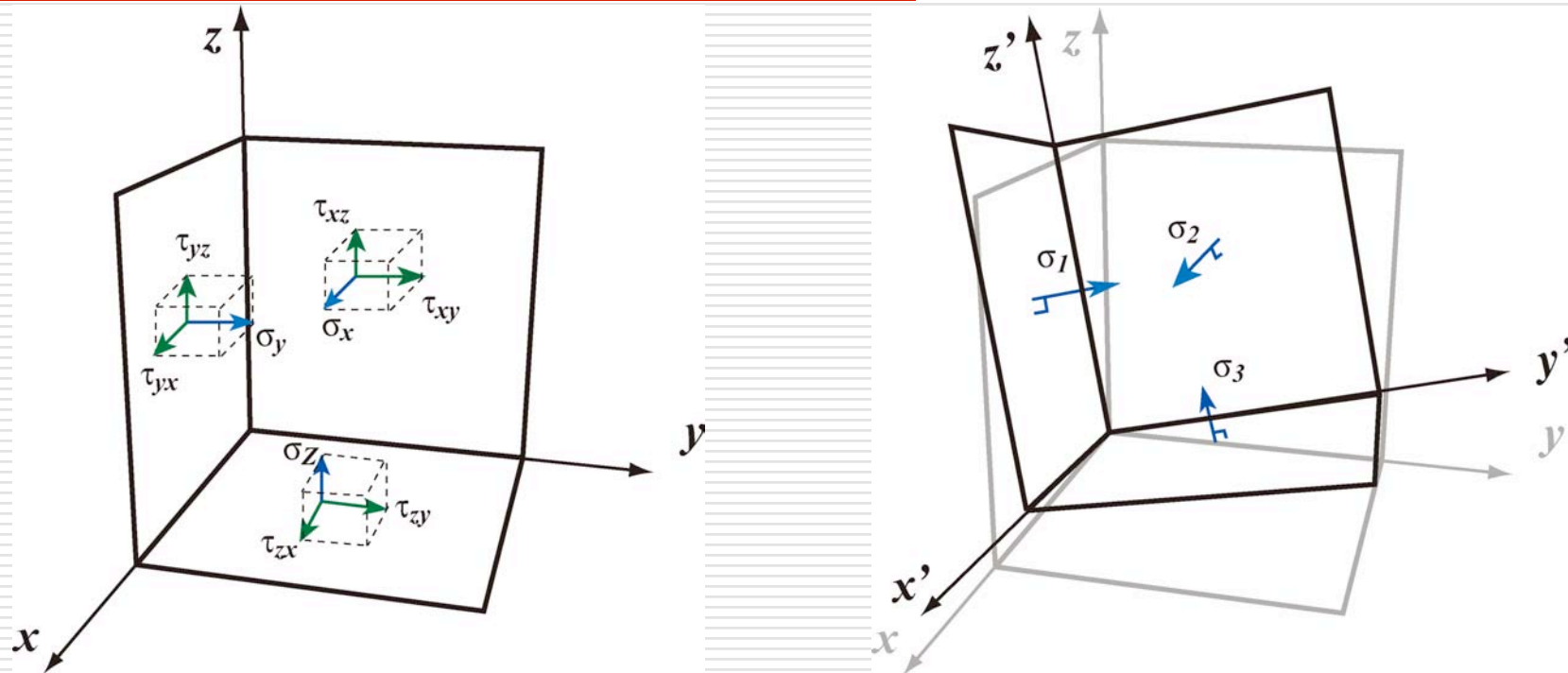
$$\tau_{yz} = \tau_{zy}$$

$$\tau_{zx} = \tau_{xz}$$

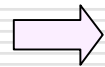
Cauchy応力テンソルは対称テンソルであり、

応力の独立成分は  $\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z, \tau_{xy}, \tau_{yz}, \tau_{zx}$  の6成分

# 力の釣合い



$$\sigma = \begin{pmatrix} \sigma_x & \tau_{xy} & \tau_{zx} \\ \tau_{xy} & \sigma_y & \tau_{yz} \\ \tau_{zx} & \tau_{yz} & \sigma_z \end{pmatrix}$$



$$\begin{pmatrix} \sigma_1 & 0 & 0 \\ 0 & \sigma_2 & 0 \\ 0 & 0 & \sigma_3 \end{pmatrix}$$

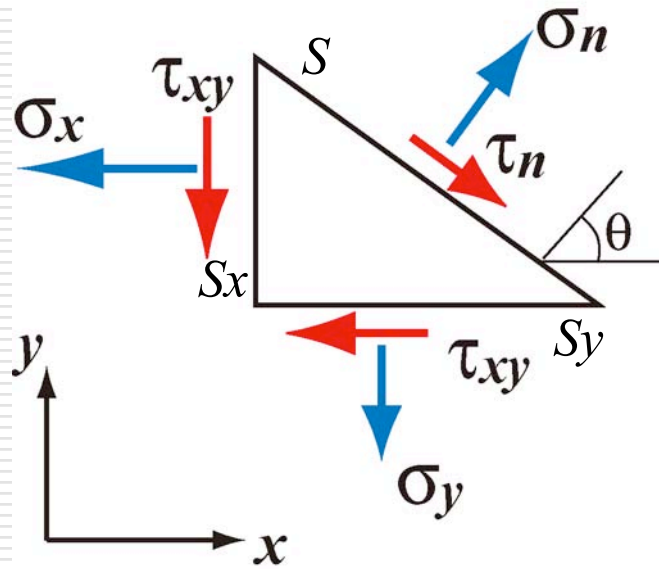
主応力, 主方向

座標軸を回転させていくと, 対角成分のみとなる座標軸が存在する。

# 力の釣合い

2次元で考えてみる。  $\sigma_n$ 方向の力の釣合いは

$$\begin{aligned}\sigma_n \cdot S &= (\sigma_x \cos\theta + \tau_{xy} \sin\theta) \cdot S_x + (\sigma_y \sin\theta + \tau_{xy} \cos\theta) \cdot S_y \\ &= \sigma_x \cos^2 \theta \cdot S + \tau_{xy} \sin\theta \cos\theta \cdot S + \sigma_y \sin^2 \theta \cdot S\end{aligned}$$



$$\begin{aligned}\sigma_n &= \sigma_x \cos^2 \theta + \sigma_y \sin^2 \theta + 2\tau_{xy} \sin\theta \cos\theta \\ &= \frac{\sigma_x + \sigma_y}{2} (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) \\ &\quad + \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} (\cos^2 \theta - \sin^2 \theta) + 2\tau_{xy} \sin\theta \cos\theta \\ &= \frac{\sigma_x + \sigma_y}{2} + \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \cos 2\theta + \tau_{xy} \sin 2\theta\end{aligned}$$

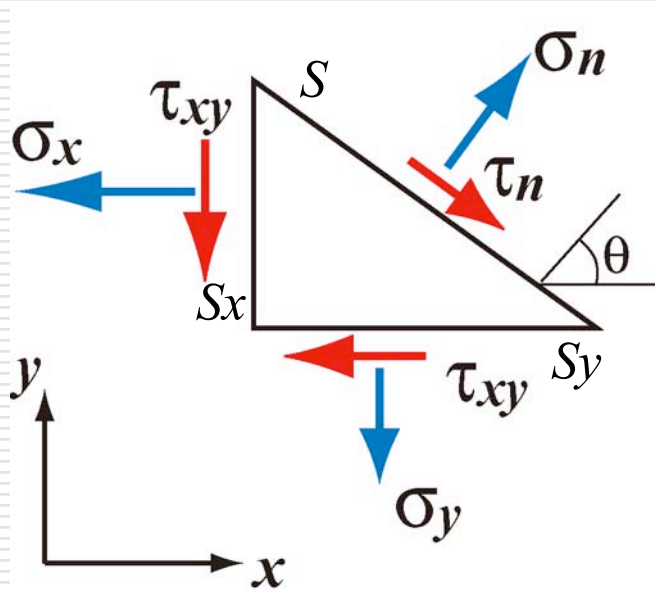
倍角公式

$$\begin{aligned}2\sin\theta \cos\theta &= \sin 2\theta \\ \cos^2 \theta - \sin^2 \theta &= \cos 2\theta\end{aligned}$$

# 力の釣合い

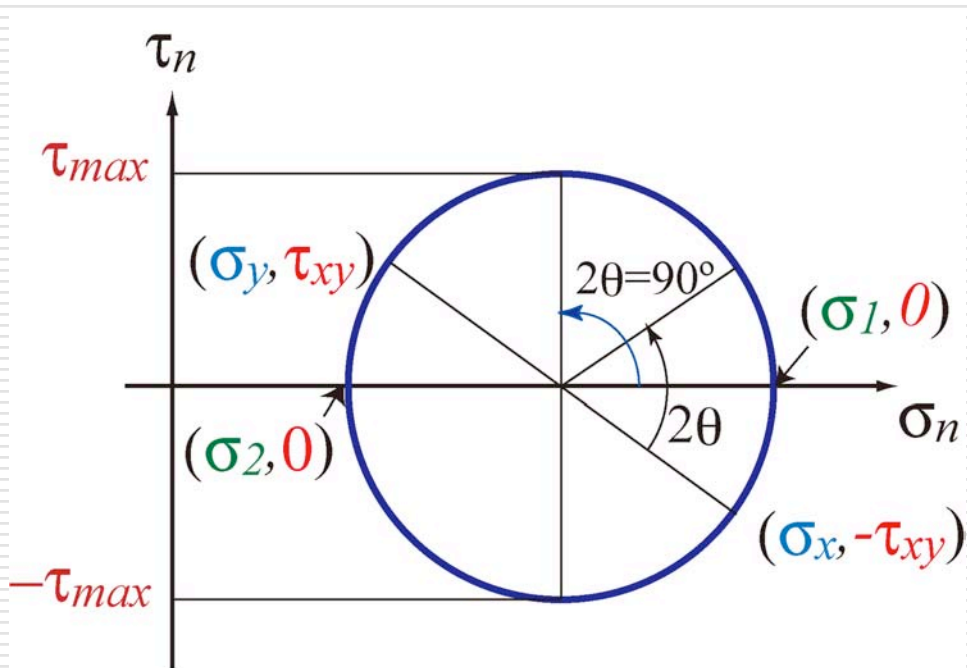
同様に  $\tau_n$  方向の力の釣合いは

$$\begin{aligned}\tau_n &= \sigma_x \sin\theta \cos\theta - \sigma_y \sin\theta \cos\theta - \tau_{xy} (\cos^2\theta - \sin^2\theta) \\ &= \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \sin 2\theta - \tau_{xy} \cos 2\theta\end{aligned}$$



# 力の釣合い

縦軸を、横軸を  $\sigma_n$  でグラフにすると、



$$\sigma_n = \frac{\sigma_x + \sigma_y}{2} + \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \cos 2\theta + \tau_{xy} \sin 2\theta$$

$$\tau_n = \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \sin 2\theta - \tau_{xy} \cos 2\theta$$

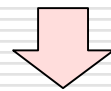
モールの応力円

- ・横軸と交わる点が主応力 ( $\tau_n = 0$  となる)
- ・その面から  $45^\circ$  傾いた面でせん断応力最大 ( $\tau_{max}$ )

# 力の釣合い

3次元だと？

主応力  $\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3$  は 
$$\begin{pmatrix} \sigma_x & \tau_{xy} & \tau_{zx} \\ \tau_{xy} & \sigma_y & \tau_{yz} \\ \tau_{zx} & \tau_{yz} & \sigma_z \end{pmatrix}$$
 の3つの固有値



$$\begin{vmatrix} (\sigma_x - \sigma) & \tau_{xy} & \tau_{zx} \\ \tau_{xy} & (\sigma_y - \sigma) & \tau_{yz} \\ \tau_{zx} & \tau_{yz} & (\sigma_z - \sigma) \end{vmatrix} = 0 \quad \text{の解}$$

## 力の釣合い

$$\begin{aligned} & \sigma^3 - \sigma^2(\sigma_x + \sigma_y + \sigma_z) \\ & - \sigma \left\{ -(\sigma_x \sigma_y + \sigma_y \sigma_z + \sigma_z \sigma_x) + \tau_{xy}^2 + \tau_{yz}^2 + \tau_{zx}^2 \right\} \\ & - (\sigma_x \sigma_y \sigma_z - \sigma_x \tau_{yz}^2 - \sigma_y \tau_{zx}^2 - \sigma_z \tau_{xy}^2 + 2\tau_{xy} \tau_{yz} \tau_{zx}) = 0 \end{aligned}$$

$$\sigma^3 - J_1 \sigma^2 - J_2 \sigma - J_3 = 0$$

$$J_1 = \sigma_x + \sigma_y + \sigma_z$$

$$J_2 = -(\sigma_x \sigma_y + \sigma_y \sigma_z + \sigma_z \sigma_x) + \tau_{xy}^2 + \tau_{yz}^2 + \tau_{zx}^2$$

$$J_3 = \sigma_x \sigma_y \sigma_z - \sigma_x \tau_{yz}^2 - \sigma_y \tau_{zx}^2 - \sigma_z \tau_{xy}^2 + 2\tau_{xy} \tau_{yz} \tau_{zx}$$

$J_1, J_2, J_3$  は座標軸の取り方に依存しない。

応力の不変量

# 力の釣合い

---

座標軸が主軸と一致すると、せん断応力が0となるので

$$J_1 = \sigma_1 + \sigma_2 + \sigma_3$$

$$J_2 = -(\sigma_1\sigma_2 + \sigma_2\sigma_3 + \sigma_3\sigma_1)$$

$$J_3 = \sigma_1\sigma_2\sigma_3$$



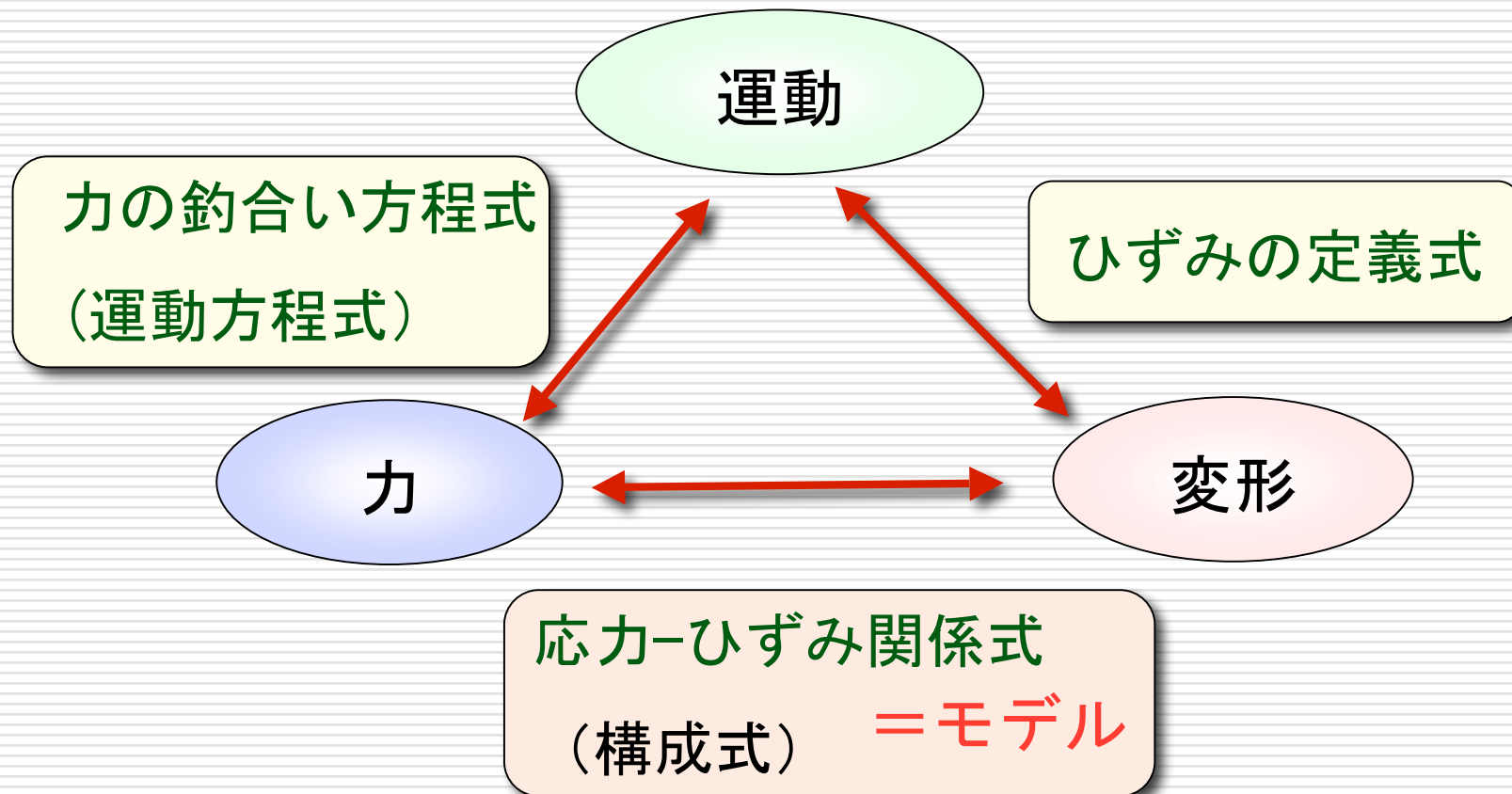
# 塑性力学の基礎(応力とひずみ)

---

- 塑性力学の枠組み
- 応力の定義
- 力の釣合い
- ひずみの定義

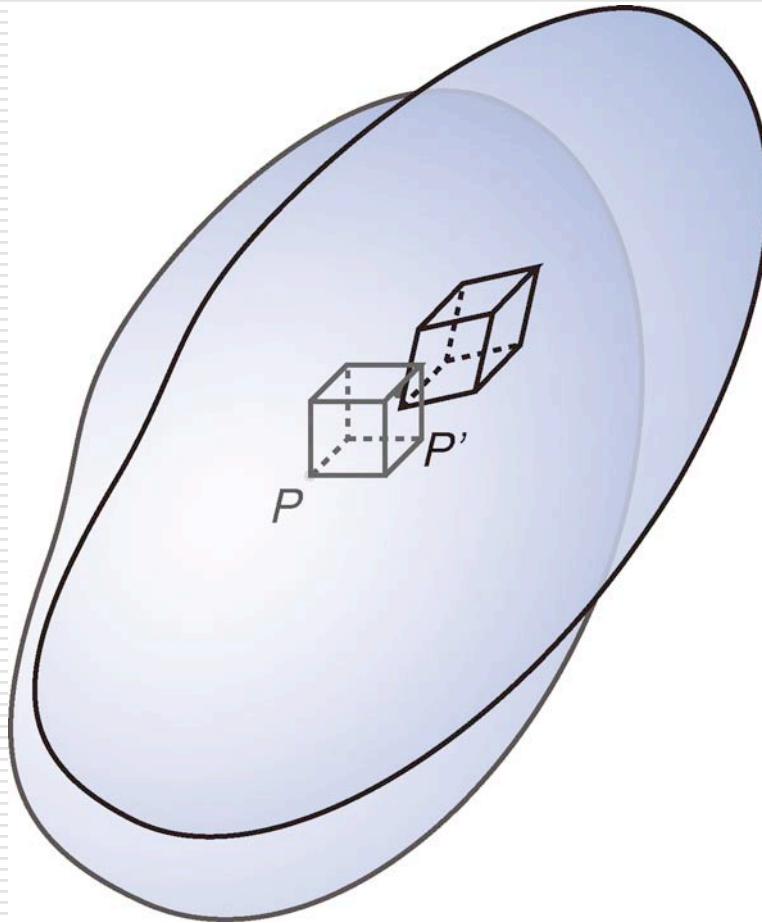
# 塑性力学の枠組み

連続体の状態を支配する方程式



# ひずみの定義

---



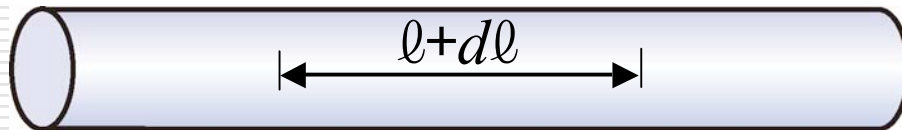
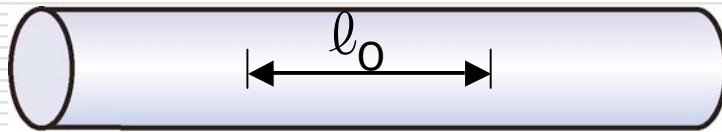
変形とは

- ・材料の伸び, 縮み
- ・材料のゆがみ

場所によって変位が異なること  
によって生じる。

# ひずみの定義

まず一軸変形を考える



$l$  から  $l+dl$  の時の  
ひずみの増分

$$d\varepsilon_0 = \frac{dl}{l_0} \quad \text{公称ひずみ増分}$$

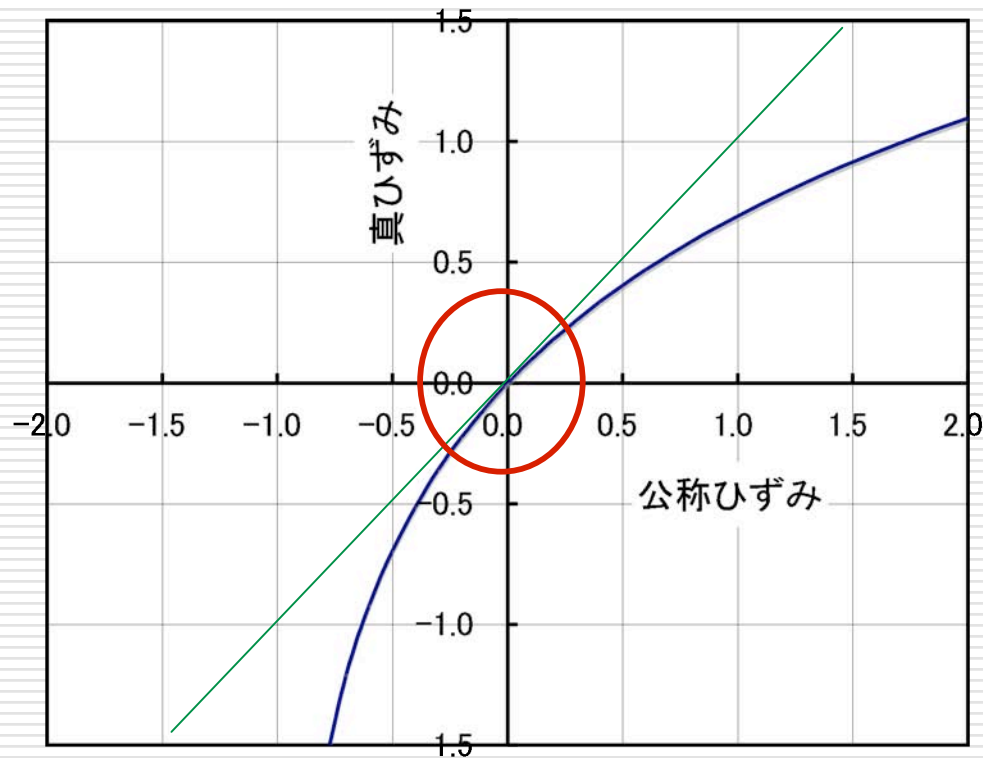
$$d\varepsilon = \frac{dl}{l} \quad \text{真ひずみ増分}$$

それぞれ積分すると

$$\varepsilon_0 = \frac{l - l_0}{l_0}$$

$$\varepsilon = \int_{l_0}^l \frac{dl}{l} = \ln\left(\frac{l}{l_0}\right)$$

# ひずみの定義



公称ひずみ  $\varepsilon_0 = \frac{l - l_0}{l_0}$

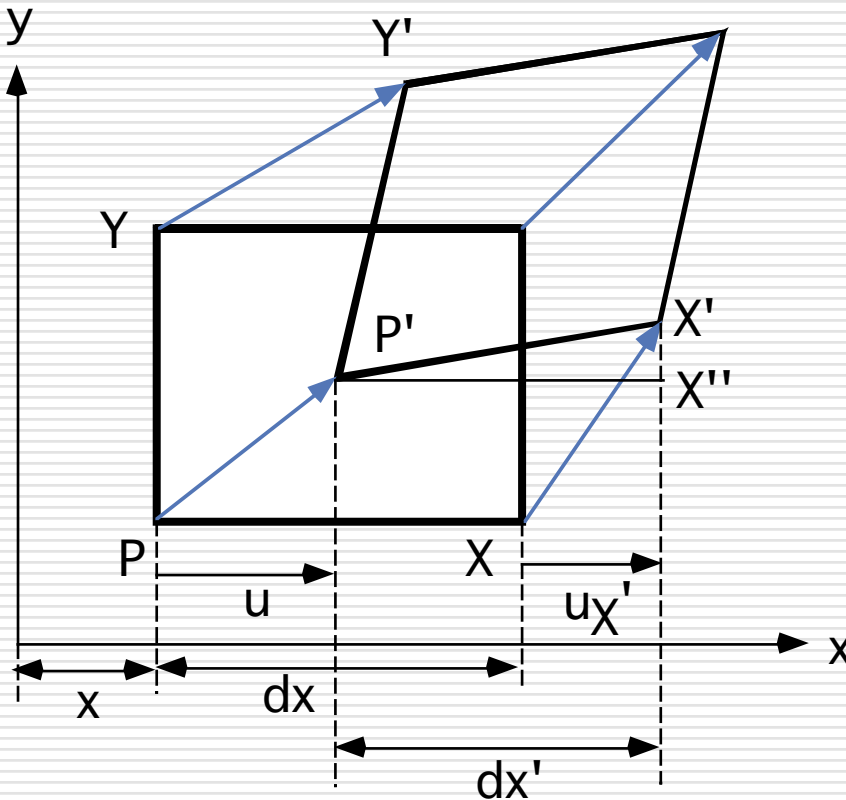
真ひずみ  $\varepsilon = \ln\left(\frac{l}{l_0}\right)$

ひずみが微小な時は、

$$\varepsilon_0 \approx \varepsilon$$

# ひずみの定義

## □ ひずみー変位関係



次に2次元で考える。

幅dx,高さdyの微小四角形を考え, 変形により点PがP'に, 点XがX'に変位したとする。

このときの各点のx座標は

$$P : x$$

$$X : x + dx$$

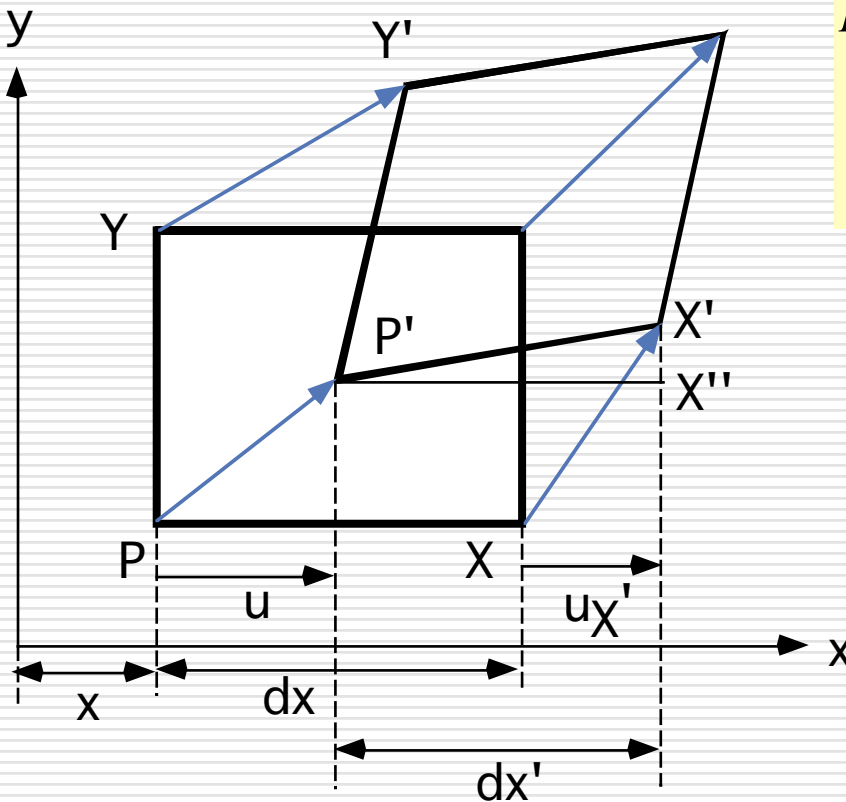
$$P' : x + u$$

$$X'' : x + dx + u'_x$$

$$= x + dx + u + \frac{\partial u}{\partial x} dx$$

# ひずみの定義

## □ ひずみー変位関係



$$\overline{PX} = dx$$

$$\begin{aligned} \overline{P'X''} &= \left( x + du + u + \frac{\partial u}{\partial x} dx \right) - (x + u) \\ &= dx + \frac{\partial u}{\partial x} dx \end{aligned}$$

x方向の垂直ひずみ

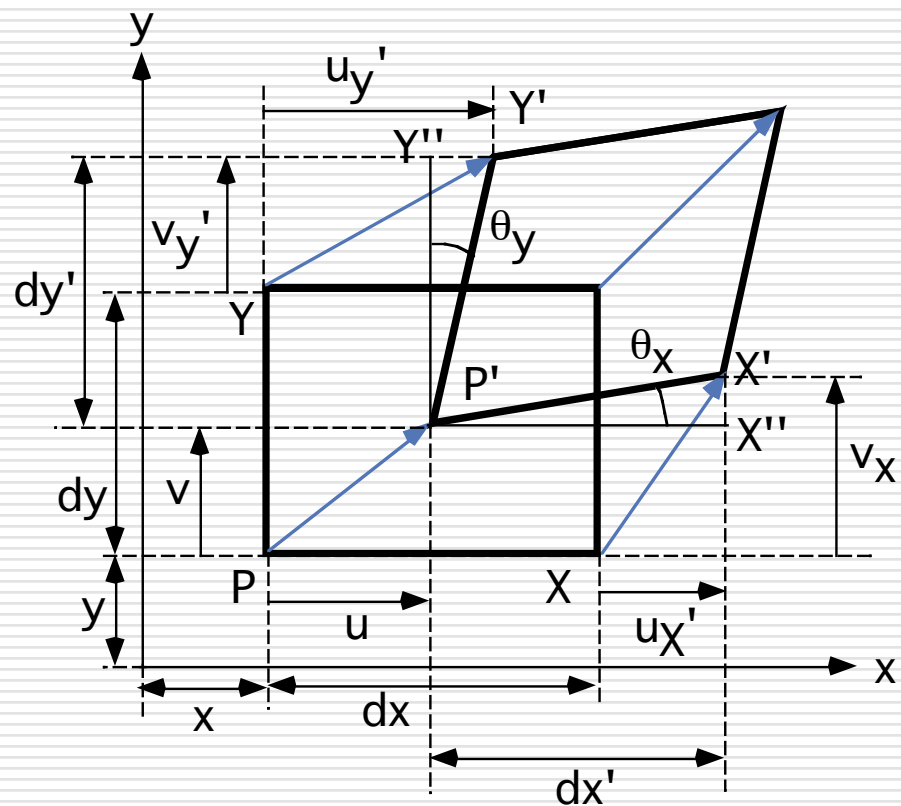
$$\begin{aligned} \varepsilon_x &= \frac{\overline{P'X''} - \overline{PX}}{\overline{PX}} \\ &= \frac{\left( dx + \frac{\partial u}{\partial x} dx \right) - dx}{dx} = \frac{\partial u}{\partial x} \end{aligned}$$

y方向も同様

$$\varepsilon_y = \frac{\partial v}{\partial y}$$

# ひずみの定義

## □ ひずみー変位関係



## せん断ひずみ

$$\begin{aligned}
 \gamma_{xy} &= \theta_x + \theta_y \\
 &= \frac{\overline{X'X''}}{\overline{P'X''}} + \frac{\overline{Y'Y''}}{\overline{P'Y''}} \\
 &= \frac{\left(v + \frac{\partial v}{\partial x} dx\right) - v}{\left(1 + \frac{\partial u}{\partial x}\right) dx} + \frac{\left(u + \frac{\partial u}{\partial y} dy\right) - u}{\left(1 + \frac{\partial v}{\partial y}\right) dy} \\
 &\approx \frac{\partial v}{\partial x} + \frac{\partial u}{\partial y}
 \end{aligned}$$

工学的せん断ひずみ



# ひずみの定義

---

## □ ひずみー変位関係

他の成分も同様に求められる。

$$\begin{cases} \varepsilon_x = \frac{\partial u}{\partial x} \\ \varepsilon_y = \frac{\partial v}{\partial y} \\ \varepsilon_z = \frac{\partial w}{\partial z} \end{cases}$$

$$\begin{cases} \gamma_{xy} = \frac{\partial v}{\partial x} + \frac{\partial u}{\partial y} \\ \gamma_{yz} = \frac{\partial w}{\partial y} + \frac{\partial v}{\partial z} \\ \gamma_{zx} = \frac{\partial u}{\partial z} + \frac{\partial w}{\partial x} \end{cases}$$

# ひずみの定義

## □ ひずみー変位関係

$$\varepsilon_{xy} = \varepsilon_{yx} = \frac{\gamma_{xy}}{2}$$

$$\varepsilon_{yz} = \varepsilon_{zy} = \frac{\gamma_{yz}}{2}$$

$$\varepsilon_{zx} = \varepsilon_{xz} = \frac{\gamma_{zx}}{2}$$

とすると,

$$\begin{aligned} \boldsymbol{\varepsilon} &= \begin{pmatrix} \varepsilon_x & \varepsilon_{xy} & \varepsilon_{xz} \\ \varepsilon_{yx} & \varepsilon_y & \varepsilon_{yz} \\ \varepsilon_{zx} & \varepsilon_{zy} & \varepsilon_z \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \varepsilon_{11} & \varepsilon_{12} & \varepsilon_{13} \\ \varepsilon_{21} & \varepsilon_{22} & \varepsilon_{23} \\ \varepsilon_{31} & \varepsilon_{32} & \varepsilon_{33} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

テンソルひずみ

$$\varepsilon_{ij} = \frac{1}{2} \left( \frac{\partial u_i}{\partial x_j} + \frac{\partial u_j}{\partial x_i} \right)$$

# ひずみの定義

$$\boldsymbol{\varepsilon} = \begin{pmatrix} \varepsilon_x & \varepsilon_{xy} & \varepsilon_{zx} \\ \varepsilon_{xy} & \varepsilon_y & \varepsilon_{yx} \\ \varepsilon_{zx} & \varepsilon_{yz} & \varepsilon_z \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} \varepsilon_1 & 0 & 0 \\ 0 & \varepsilon_2 & 0 \\ 0 & 0 & \varepsilon_3 \end{pmatrix}$$

応力テンソルと同様、せん断ひずみが0となる座標軸が存在する。

主ひずみ, 主ひずみ方向

# 塑性力学の枠組み

連続体の状態を支配する方程式

